

高橋 秀夫

出会いの舞台はガレキの街③

「笑ウ門ニハ福来タル」

絵巻師 東野 健 一さん

大震災から早や十カ月がたった。正月明けの茶の間は、この豊か
で近代的な暮らしが不測の出来事によって一瞬の内にガレキと化す
というもろさを見せつけられた。アスファルトはめくれ、ビルは鉄
骨が突きだし、家は倒壊して長屋は炎上した。そして、沢山の人が
死んだ。

当初、一億総ポランテアと言われたように、被災地へ物資や金
品が集まった。異形の街と化した中で、それは救いとなった。しか
し時間がたつにつれ、少しづつ記憶は薄れていった。電車は復旧し
道は片付けられ、元通りの生活を取り戻すが日々増えていった。
それはまるで選挙速報のポードのようだった。

が、『復讐』が進めば進むほど様々な問題が浮かびあがって来
た。そして問題が明らかにしなければなるほど、逆にマスコミの報道は
縮小し、事実は埋もれるように孤立化していった。

ここでは詳細な報告ができないが、ぼく自身、最初の動機は「観
客」や「評論家」から脱げるためにテレビのスイッチを切り、目に
見えるつながりの中で救援活動を始めた。どこに何をしたいとい
のかは、自身の目線がもたされた。そして、そのつながりの中
で、たくさんのステキな人に出会った。

東野健一さんその一人である。
友人の慧婆さん(風の楽団)か
ら、震災で阪神間の音楽家やアーテ
ィストが仕事がなくなり困っている
という話を聞き、奈良でもチャリテ
ィーだけではなく、音楽家やアーテ
ィストの仕事の場として話さばい
コンサートを開こうといひ話さばい

らんでいった。
それは「いのちのゆめ」というタ
イトル(月)回、一年間のコンサ
ートとして実現していった。すでに8
回をかぞえて、被災地の情報
が途絶える中、生の声(音楽家も被
災者たち)や現地の様子を同時に
うかがえる貴重な場になっている。

東野健一さんは、このコンサート
シリーズの第二回目の出演者として
迎えた方。神戸生まれで描きであ
り、紙芝居も演ずる人である。アト
リ工が神戸市長田区にあり、震災の
時に炎上はまがれたものの、ほぼ
全壊状態であったという。
この東野さんの紙芝居は自作のも
ので、一枚一枚引き抜いていくあの
紙芝居ではなく、巻物になっている
。大きな声と独特の画面のこの絵
巻物は、子どもも大人も楽しませ
てくれるもの。「時の語り部」と言
う東野さんの紙芝居は、文字通り私
たちに語りかけ、あるいは問いかけ
るものである。それは私たちが忘れ
かけている生活文化を呼び起こすも
ののようである。

「昔、天も地もなかつたころ……」
と、びっくりするくらい大きな声
で始まるこの紙芝居、いつの間にか
大人も子どもも輪になって……
「これ、何だかわかるか？」人間
の輪から、「くも」「ねずみ」と
返ってくる。
「なますに見えんかな」と東野さん
どう見てもなますには見えにくい



が、みな何を共感したかドット
と輪が東野さんに響るよに波う
ち、笑い声が見えるほどにその輪か
ら飛び出している。
日頃、テレビや雑誌に慣れている
子どもたちにとって、目をむいて大
声で語りかけてくるこのおっさん
は、異常なほどに新鮮でうれしいの
だ。アートというより大道芸に近
い、見る者とこれほどに一体になっ
てしまうものが、今の世の中に絶え
ていないことがわかる。東野さんの声
が大きいから、こっちは大声を出し
て思い切って笑えるのだろ。
この人の「輪」をつくる芸、紙芝
居はさながら人の「和」をもつる
よつた。
「……………」
東野さんは震災当初を思い出
こす。
「人間さやや生活のにおいがち
やまになつていて、まるでアジヤ
だったから、前は各々の家の
は閉じこもるようになって、台所の
ごはんのにおいや声などは外に聞こ
えてこなかった。ところが地震でせ
んぶオープン。あっちこっち炊き
出したがあるし、長田あたりだと多
国籍だから、さらにいろんなにおい
がある。それがごちゃ混ぜになつて
、何とも言えない「におい」が街をお
おつていた時のことを、東野さんは
非常に印象的に思い出す。
「これがホンマやで」と。
徐々に街が復活していくにつれ、
この「におい」がなくなっていくの
が何とも言えなかつたと東野さん。
確かにそんな生活文化の風景の中
から、人と人がどう関係していっ
たらいいの、人と人がどう助け支え
合つていったらいいのかを、かつて
は教えられていたのかも知れない。
長田はお地震さんがなくさんあつ
た所だぞうだ、でも残念なことに、
その多くの地震被災で焼けてしま
い、お地震さんを世話していたお年
寄りも又、たくさん亡くなつたと聞
く。子どもたちの楽しみの地震盆
も、地震ぬくりそのものがなくなっ
てしまったから、見送りになつたと
ころが多い。
でも、何とかできないものかと焼
け残つたお地震盆を探し集め、サ
サやな地震盆を小学校の庭で実現
できたぞうだ。たつた20体だつた
が、東野さんはまた子どもたち
と焼け残つたお地震さんの前で、大
声で語りかけた。
「昔、天も地もなかつたころ……」
この大震災を救いがたしとない
ていたお地震さん、きつと子ども
たちの輪の中で思わずクスッと笑っ
たのではなかつたらうか。
東野さんからぼくは、ごちゃませ
になつた、何とも言えない「人間」
のにおいをかかせてもらったように
感じている。」(1995年12月)